文学の杜

仙台文学館友の会会報

第61号
＝20周年記念特集＝

令和元年11月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

友の会20周年記念によせて

これまでの歩みに思いを馳せて

友の会会長　渡辺　祥子

友の会20年の歩みを考える時、この仙台の地で、文学を愛し、地域を愛してきた多くの方々を思わずにはいられません。

仙台文学館開館と時を同じくして誕生した友の会は、文学館の応援団的組織を作ろうと、市民の方々が声を掛け合い、文学館が開館準備をしている頃から同じように準備を始めたと伺っております。数多くある友の会の活動の中でも、会員自らが役員会を組織し、企画・運営を長年継続している会はそう多くないのではないでしょうか。今回の会報誌では、誕生当時を知る、沼沢郁子さんと前原正治さんお二人へのインタビューも掲載しておりますが、市民が積極的に関わり、館と連携・交流をしながら、自らも楽しみながら文学と市民の架け橋になっている活動は、仙台文学館の持つ特性の一つにもなっているのではないかと思います。

私は、友の会が活動をはじめて11年目がスタートする時に会長職を引き継ぎましたが、こうした先輩方の歩みを受けてのスタートに、とてもプレッシャーを感じたと共に、この地の持つ豊かな人々の情緒にも触れられ、こうした場に一緒にいられることに嬉しさを感じたことを覚えております。

今回の20周年を受け、これまでのつながりや積み重なりを大切にしながら、さらに新たな歩みを進めていかなければと思っております。これまでの多くの皆様方のお力添えに感謝をすると共に、これからも、友の会活動へご理解とご協力を賜りますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

氷イチゴの味

仙台文学館館長　小池　光

七月五日、文学館友の会有志のみなさんと小型の貸し切りバスをチャーターして斎藤茂吉記念館を見学する機会があった。茂吉記念館は、茂吉の生家に近い、山形の上山にある。奥羽本線の沿線にあり、茂吉記念館前という駅もあるが、なかなか列車では訪ねがたい。貸し切りバスの旅が一番適切なのである。

茂吉記念館は、開館五十年を迎え、すっかりリニューアルされていた。エレベーターも付設されていた。高齢になって階段を上り下りするのが辛くなった人もこれで安心して館内を巡れる。山形県の力の入れ方がわかるというものである。

十七冊の歌集のほかに、茂吉は多くの評論、研究、また随筆を書いた。多くが今日まで丁寧に保存されており、その現物の一端に接することができるのは壮観というべきである。

短歌、文学だけでなく、書はすばらしいし、絵も巧みであった。総合芸術家としての面目、ここに尽きるという感じがする。友の会の皆さんもこれまであまりなじみのなかった東北が誇る斎藤茂吉という文学者の全体像をかいま見て、大いに満足されたようだった。

帰りにドライブインに立ち寄って、お土産など買った。小さなレストランがあり、私はひとりで「氷イチゴ」を食べた。久しぶりに食べた氷水は甘くて、冷たくて、なつかしい味がした。またみなさんとこういう小旅行を楽しみたいものである。

文友一滴

朝晩の空気がヒンヤリと感じられ、鼻が金木犀を見つける。鍋の季節の到来だ。スーパーの棚には鍋出汁のコーナーが設けられる。その種類の多いこと。最近目立つのは、個食用のタイプだ。考えてみれば、レトルトカレーだって個食用なのだから、鍋出汁にそれがあっても不思議ではない。今の日本をよく写し出していると思う。

週日の夕食を家族全員で囲める家庭は、いったい何割くらいあるのだろう。家族構成や働き方が、つい30年程前とは大きく変わってきた。それぞれが好きなレトルトカレーを選び、それぞれのタイミングで食べる。鍋だって、個食用の具材の種類も増えてきた。もう既に鍋に具材が盛り付けられているものまである。そうそう、この頃増えてきたものがもう一つある。お弁当というか定食というか、そういうワンプレートの冷凍食品だ。焼き魚や焼き肉などの定番定食から、ロコモコやガパオライス、お子様ランチまである。そこから見える食事の風景を、単純に非難することはできない。何だかなと思う気持ちが、現実に負けてしまう。

「おでんで始まる鍋の五段活用」といった人がいる。週日は家族がそろわないから、おでんを作るのは週末だ。家族の好みの具材をそろえると、大鍋で大量に仕込むことになる。結末はご想像の通り。先ず、いい出汁が出た汁を取り分ける。「おでん月見うどん、ちょっと好きなのよね」といたずらっ子のように言っていた。残りはカレー、炊き込みごはん、お好み焼きなどに「化かす」のだそうだ。今週がおでんなら、来週は水炊き、次はちり鍋かな。五段活用のこつは「薄味の出汁の鍋でスタートすること。鍋は続くよどこまでも」と笑っていた。

鍋の野菜の代表格、白菜や長ネギが台風の被害を受けている。今年の鍋には工夫が必要かな。（和）

第60回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・奥田梨智さん（仙台市）
晩翠あおば賞・大久保観さん（仙台市）

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第60回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月20日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、登米市立横山小学校2年奥田梨智さんの「あいたいよ パパ」。晩翠あおば賞は、仙台市立上杉山中学校3年大久保観さんの「時速一〇〇㎞」に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数658編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県登米市・佐藤結奈さん、青森県八戸市・向谷地彩七さん、登米市・鈴木颯さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・佐藤かえでさん、仙台市・柏崎日向子さん。

私と郷土と文学 ⑳

川口俊和『コーヒーが冷めないうちに』（サンマーク出版）、鈴木健二『昭和からの遺言』（幻冬舎）。最近この2冊を読み、学生期を過ごした津軽、弘前の地がなつかしく想い出された。

『コーヒーが…』は一種のタイムスリップもの。現実離れした物語だが、「現実は変わらなくとも、人の心が変わるのなら…」の言葉が読み手を引きつける。舞台はとあるコーヒーショップ。喫茶店と呼んだ方がいいかもしれない。店へ出入りするときに「カランコロン」の音色が響きわたり、カウンターがある。どこかノスタルジーが漂う。脳裏に浮かんだのが、よく足を運んだ弘前かくみ小路にある「万茶ン」という喫茶店。太宰治も足を向けたこの店は昭和4年創業の老舗。今もレトロ風の残り香が漂うと伝え聞く。

『昭和からの遺言』は東京下町生まれの元NHKアナ鈴木健二が昭和20年春、旧制弘前高等学校（現弘前大）へ入学するために弘前にやって来る。津軽の自然に触れ、「聳える岩木山の温容、穏やかに連なる青い山脈の稜線、北国なのに暖かさを豊かにたたえひろがる緑の野面…、津軽は私の生涯の心のふるさととなりました」と感慨を綴っている。鈴木はすぐに北溟寮（ほくめいりょう）の寮務委員長に選ばれるが、私が在学したころの北溟寮はリンゴ畑に隣接し、学長から「リンゴがもがれる被害が出ている。諸君らの良識を信じて止まない！」とお達しがあったことを覚えている。半世紀前の話である。

過ぎ去った時間は戻せないが、はからずも2冊の本がはるか遠くになった弘前時代へ導き、すがすがしい一条の光がさしこんだような心地へ誘ってくれた。（其田敏美）

弘前に寄せる想い

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

風と歩こう ⑩

Photo by Ryuji Sasaki

久しぶりに庭の奥の小高い野原まで足をのばした。水辺沿いのゆるい坂道を歩いて少々息が切れていたので、前方に勾配のきつい斜面が見えたときは、一瞬やめようかと思った。が、上がりきった。

木漏れ日がさしこむ野原に置かれた白い椅子たちが目に入ると、初めて見たときのさわやかな感動が甦ってきた。

「さあ、どうぞ腰かけてお休み下さい」と椅子たちが語りかけてくる気がする。一人掛け椅子をみると、なぜかそこに腰かけただろう人の姿を想像してしまう。その日も想像しながら眺めていたが、ふと私はその置かれ方が気になった。

仲良く二つ並んで二か所に置かれた椅子は広場を間に向き合っているのに、一つだけポツンと置かれた椅子はそっぽを向いて淋しげだ。ひとりでやってきた私は立ったまま、頭上の枝に目をやった。

私のそんな思いを笑うように、まだ細い木に成ったたくさんの赤い実たちが、秋風にゆれて実を震わせていた。（近）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第61号20周年記念特集号をお届けします。

▽テレビ番組で福山雅治と石田ゆり子が昇仙峡を歩いていた。平野啓一郎原作、映画「マチネの終わりに」に出演。私も歩いた。弥三郎岳の頂上の1枚岩にねそべって宇宙に放り出されたような感覚は忘れられない。パノラマ台では自分宛に便りを書いて、約束のポストへ投函。1年後の配達にニンマリした。（一）

▽大型台風による水害について、古い地名には土地の特徴と災害への警告がこめられていることをラジオで聞いた。かつて住民にも読み難い古臭く画数の多い漢字の地名を、シンプルで親しみやすい名前に変えるブームがあったが、言葉の重要な役目を軽んじたことでなかったかとしばし考え込んだ。（近）

▽ラグビーが好き。少し前までは怪訝な顔をされた。やっと胸を張って好きだと言える。○○女子という言葉で、好きなことは好きと言えるようになった。好きの男女平等、女だてらにからの解放なのかな。汚れる、痛そうと言われていたのに、ファンが増えた。昨今の筋肉ブームも影響しているのかな。（和）

▽家に居る時は一日中CDをかけている。使い過ぎたのかプレーヤーが故障してしまい、2週間ばかり音のない生活をした。修理が済んで戻ったので、早速聴いたところ、驚いたことに音楽を煩わしいと感じたのだ。静かな日々を送っているうちに、耳はこちらの環境が好きだと主張し始めたようである。（佐）

仙台文学館友の会のあゆみ展

展示が語る歴史

展示作業を終えて記念撮影

友の会発足から二十年間の活動の記録を一堂に集めた「仙台文学館友の会のあゆみ展」が館内2階ギャラリースペースで9月4日から11月27日まで行われた。

開始前日、展示作業を友の会会長ほか役員と事務局の8人で行った。事前に用意されて一台の台車に収まっていたパネルや写真類、活動記録のファイル等が、事務局の指示による連携作業でそれぞれの場所に置かれるや、なにもない壁がみるみるうちに特設コーナーに変身していった。横幅のある脚立に上がった一人が、天井近くに取り付けてあるレールにフックをつけて、下から手渡された特殊なワイヤーをかけて位置を調整し、パネルが吊り下げられる。訪れる人に見やすい高さが決まる手順の巧みさに、感心しながら見守った。

パネル吊り下げ作業中

挨拶が書かれた立て看板から展示は始まる。平成11年の仙台文学館開館の同年に行われた友の会設立総会から、令和元年の今年までの年譜が8枚のパネルに掲示されていて、役員の交代、会員の活動等が年次に紹介されている。パネル地色は白と淡いグリーンが交互に配され年代順に読み易い工夫がされている。

年3回の会報の名前「文学の杜」は創刊号では使われておらず、第2号からついたことを会報バックナンバーのファイルで知った。60号まで停滞なく発行されている会報、当初は一人の役員と事務局が担当していたが、36号から編集委員4名となっている。会員参加型になってきた紙面の変遷を見ることが出来る。

円形窓に沿って並べられた三脚イーゼルの写真パネル6枚は、毎年行われてきた施設見学会と文学散歩の写真だ。初回の山形遅筆堂文庫と平成17年の鶴岡への見学会は申し込みが多く2日に渡って実施されたとのこと。友の会発足初期の意気込みを思わせられた。ちなみに今年は小池館長が同行し、車中で解説を聞かせていただいた。行事の実施日と施設名がかかれてあるので、当時参加した役員は懐かしさからつい見入ってしまい、幾分ぼんやりの集合写真の前で「ピンボケでかえって、よかった、よかった」との声をもらした。一同に笑いが広がった。

見学会・文学散歩のあゆみを紹介

今や友の会活動に欠かせない隔月の読書会は42回を数え、皆勤で参加している会員もいるとのこと。取り上げられた文庫本がテーブルに置かれていて、手に取って見ることができる。多彩なジャンルの課題本は毎回参加者間の話し合いで決めているということだ。自分では選ばない作品を課題本として読んで、新しい魅力に気づいた、有意義だったという感想がよく聞かれるそうだ。

圧巻は平成11年度からこれまでの会員証が額の中で一堂に会した展示。初代館長井上ひさしの言葉が印刷されたデザインから、文学館周りの風景やオブジェの写真に代わったという違いはあるが、モチーフの面白さに年度が過ぎても手元におきたい気分にさせられる。

友の会講座の記録もあり、井上ひさし初代館長、小池光館長、佐藤通雅氏と佐々木隆二氏の短歌と写真のコラボ等の会場の様子を写真展示している。

まもなく展示完成！最後の調整

展示を手伝って、改めて20年間の厚みある友の会活動を振り返ることができた。

（一、近）

仙台文学館友の会の歩み

- **1999（平成11）年3月28日**　仙台文学館開館。仙台文学館友の会設立発起人会発足。10月、友の会設立総会。会長に鮎貝盛秋氏
- **同年11月**　「仙台文学館友の会会報」の創刊号を発行。第2号から「文学の杜」の名称に
- **2000（平成12）年9月**　「金子みすゞの世界展」で友の会が書籍、絵葉書などの販売に協力
- **2002（平成14）年1月**　会員研究発表会「文学の考古学　相馬黒光『広瀬川の畔』を読み解く」（発表者は渡邊慎也氏）
- **2004（平成16）年2月**　会員限定の井上ひさし館長講演会
- **同年7月**　会報第15号から発送作業は会員のボランティア方式で実施
- **2005（平成17）年7月**　会員限定の井上ひさし館長講演会　**9月**　宮尾登美子サイン会
- **2006（平成18）年6月**　友の会サポーター制発足。会報の発送、見学会の世話役など活動
- **2007（平成19）年3月**　井上ひさし館長が退任　**4月**　小池光氏が新館長に就任
- **2009（平成21）年3月**　友の会会報第29号・10周年記念特集を発行
- **同年5月**　友の会総会時に井上ひさし前館長と友の会との懇談会
- **2010（平成22）年2月**　10周年記念事業として友の会主催の沼沢郁子朗読会を開催
- **同年4月**　総会で新会長に渡辺祥子氏を選出。他の役員も大幅に入れ替わる
- **2011（平成23）年7月**　東日本大震災（3月）のため3カ月遅れで総会、活動再開
- **同年8月**　新事業として読書会スタート
- **同年11月**　この年から秋の施設見学会を、市内文学散歩に
- **2014（平成26）年5月**　総会時に小池光館長による会員限定の啄木講座を開催
- **同年11月**　友の会会報第48号・15周年記念特集を発行
- **2019（平成31）年2月**　新事業として友の会文学講座スタート　第1回は「佐藤通雅〈短歌〉×佐々木隆二〈写真〉【3.11の記憶】を語る」
- **同（令和元）年7月**　20周年記念文学散歩小池光館長と「斎藤茂吉記念館」を訪ねる旅を実施
- **同年9～11月**　発足20周年記念「友の会のあゆみ展」開催
- **同年11月**　友の会会報第61号・20周年記念特集を発行

施設見学会・文学散歩の歩み

（平成26年以前は15周年特集号）

- **2015（平成27）年7月**　第26回施設見学会・山形県尾花沢市の「芭蕉清風歴史資料館」、大石田町「大石田町立歴史民俗資料館」。大石田では、隣接の斎藤茂吉が疎開していた聴禽書屋も見学した。
- **同年10月**　第4回文学散歩・塩竈市の「鬼房小径」を俳人渡辺誠一郎さんによる解説で訪ねる。「エスプ塩竈」内の「長井勝一漫画美術館」。
- **2016（平成28）年7月**　第27回施設見学会・山形県南陽市「夕鶴の里」、高畠町「浜田広介記念館」。「ひろすけホール」では、かけつけて下さった宮原博道さんの篠笛演奏を聴いた。
- **同年10月**　第5回文学散歩・仙台市内「北目町界隈を歩く・スズキヘキの原風景」。ヘキの長男鈴木楫吉さんの解説で、スズキヘキゆかりの場所を歩いた。
- **2017（平成29）年7月**　第28回施設見学会・岩手県花巻市「新渡戸記念館」「高村光太郎記念館」「高村山荘」。花巻市のガイドボランティアさんの解説を聴きながら散策した。
- **同年10月**　第6回文学散歩・「文学館の庭と文学碑をめぐる」と題し、会報「風と歩こう」に書かれた場所を散策。海鋒義美氏の長男海鋒博美さんに「春の足おと」にまつわることを中心に解説してもらい、海鋒さんのお仲間二人に歌っていただいた。
- **2018（平成30）年7月**　第29回施設見学会・宮城県大崎市「吉野作造記念館」。この年より、施設見学会と文学散歩のどちらの要素も取り入れた内容で、年1回の実施となった。
- **2019（令和元）年7月**　第30回施設見学会・「斎藤茂吉記念館」。友の会発足20周年記念として、小池光館長に同行していただき、車中で、小池館長にとっての茂吉について講話。

20周年記念インタビュー

歴史と思い出そして明日へ

写真　佐々木隆二

会長　今日は仙台文学館友の会会報20周年記念号インタビューにおいでいただき、ありがとうございます。沼沢さんは発足から平成21年まで副会長として、前原さんも会の発足から平成21年まで監事、平成27年まで副会長として、友の会と歩んでいらっしゃいました。「友の会のあゆみ展」をご覧いただきながら、お二方と、歴史をたどってみたいと思います。

沼沢　第1回の見学会は山形県川西町の「遅筆堂文庫」でしたね。

会長　見学会の時には、バスの中でゆかりの作家の作品を朗読してくださったと聞いています。

沼沢　生の朗読ではなく、前もってテープを作りました。往復ですから、短い作品なら省略しないで読めました。

前原　そう、あれは楽しみでしたね。

沼沢　バスを借りる役目が幹事の小野一也さんでね。貸し切り料金を何とか安くしようとしてくださって。

前原正治さん

沼沢　遅筆堂文庫では、中の書庫まで特別に見せていただきました。

前原　これは高畠町の浜田広介記念館ですね。あの時は近いから2ヵ所に行ったんですね。

沼沢　こちらは横手の石坂洋次郎文学記念館ですね。

前原　横手で『若い人』で売り出した彼の出発点です。

会長　こちらは山形県西川町の丸山薫記念館ですね。

沼沢　暑かったですね、あの時は。これは昼食の時の写真、食事も楽しみでしたよね。これは石川啄木の新婚の家ですね。地元の役者さんにお願いして啄木の『ローマ字日記』の朗読をしていただいたんでした。

前原　そうでしたね。

沼沢　野村胡堂の「あらえびす記念館」もよかったですね。レコードを聴かせていただいて。

前原　胡堂は『銭形平次』などを書くときの、音楽評論は「あらえびす」と、ペンネームを分けていたんですね。胡堂の持っていた、音響設備というのかな、全部ありましたね。

沼沢　その設備で胡堂所蔵のレコードを聴かせていただいたんでしたね。

会長　いろいろなところを見学なさったのですね。

前原　行きましたね。日帰りだから少しきついこともあったけれど。

会長　近年、短時間の方が参加しやすいという声があり、近い場所を半日程度で見学できる文学散歩も企画するようになりました。

前原　あぁ、これはスズキヘキさんね。晩翠草堂にも行きましたよね。

会長　はい、そこで前原さんにお話をうかがいました。

前原　思い出しました。短い講話をしたんでしたね。

会長　会報も展示しています。こちらは10周年の記念行事の記事ですね。沼沢さんの朗読会を友の会主催で開催されたんですよね。このときも、役員だけでなく会員の方も受付など担当して、皆で作ったとお聞きしています。

沼沢　ええ。券も沢山売って。

前原　文学館の企画を応援する。加えて、友の会独自の企画があって、会報を発行する。仙台文学館と友の会はとてもいい関係だと思います。文学館そのものにも厚みが出ます。こういう関係が築かれているのは素晴らしいですね。

会長　こちらが友の会主催の読書会の様子です。宇津志さんが役員の時に「小さな集まりでも独自の企画で続けられること」として始まりました。そして、こちらがこれまでの会員証です。

沼沢　全部取ってありますよ。

前原　この会員証は井上ひさし前館長の字ですよね。

会長　そうですね。現在は、佐々木隆二さんの写真で作っています。今年は20周年ということで、小池館長の短歌を会員証に使わせていただきました。

見学会のパネルを見ながら語り合う3人

沼沢郁子さん

会長　友の会のあゆみを展示で見ていただきましたが、改めて感想をお聞かせください。

沼沢　こうして振り返ってみると楽しかったし意味のあることだったのですね。

前原　そうですね。

会長　友の会との関わりでご自身にとってプラスになったとか意義深かったなということはおありですか。

沼沢　それはもう、学ぶ事も多かったし、新しい体験もさせていただきました。自分の朗読会と違って、見学先が決まると、そのゆかりの作品の選択、読み、収録と孤独な作業ながら、大変勉強させていただきました。

会長　それまでのご自身の世界が広まったり深まったり。前原さんはいかがですか。

前原　ええ、確かに広がりましたね。僕は表に出て何かするということではなく、人との繋がりを大事にしようとやってきたような気がします。

会長　お二人にとっても友の会の繋がりというのは大きかったのでしょうね。友の会の発足当初の思い出をお聞かせください。

沼沢　初めて仙台に文学館ができて、その友の会だから人数を増やしていかなければならないと、開拓精神のようなものを持っていたような気がします。できるだけ周りの人に声をかけたりしました。

会長　皆さんが盛り上げようと親身になって思ってくださる。その友の会の魅力というのは何なのでしょう。

前原　ひとつは見学会ではないでしょうか。

会長　見学会の魅力とはどんなことでしたか。先ほど展示を見ながらも、いろいろ思い出していただきましたが。

前原　見学会は、もちろん行き先の文学館なり資料館なりはいいのですけれど、行くときのバスの中の自己紹介、それがおもしろいというのもありますね。それぞれいろんな話がある。それがおもしろかった。それから、食事の楽しみもありましたよね。

沼沢　そうそう、土地のものね。

前原　みんなで一緒に一日行動を共にする、そういうのは楽しい時間だと思います。

会長　それから、10周年の企画ですね。準備や受付も会員と役員が携わった大きな事業でしたね。

沼沢　お祭り好きが多かったんでしょうか。大変でしたけど、楽しかったですね。

会長　役員を退任されてから、友の会をどのようにご覧になっていますか。会報を読まれての感想などいかがですか。

沼沢　読書会は地道で地味だけれど友の会らしい活動ですよね。

会長　前原さんはいかがでしょう。

前原　素晴らしいと思いますよ。いろいろな企画をしている、そういう会は少ないと思います。発足当時と比べて会員数が減ったとしても、へこたれることはないと思います。今という時代もありますからね。

渡辺祥子会長

会長　こういう会の存在は大切だと。

前原　そうです。ただ作品を読むだけでなく、作家や詩人など文学者の生涯や足跡をたどってみたいと思う人がいなくなれば、文学そのものも衰退してしまう。友の会はその基本をキチンと続けている。文学館には友の会のような組織がなければならないと心から思います。友の会は文学館の中の大事な一部だと思います。

会長　今後の友の会に期待することをお聞かせください。

前原　やるだけのことはしているのですから、参加人数の増減をいちいち気にすることはないと思います。

会長　会長を引き受けてからの10年、いろいろな変化がありました。友の会だからできるものをコツコツ重ねています。

前原　厳しい現実があるからこそ、こういう集まりは貴重なんですよね。

会長　ありがとうございます。今は参加できなくても、いつか参加したい。そういう気持ちになってもらえたらと思っています。

沼沢　私達の時代は芽が出て生長しかけたとき、これからが成熟期ですから。

前原　成人式が終わったばかりですから、これからです。頑張ってください。

会長　先輩からのバトンを引き継いで、次につないでいこうと思います。本日は本当にありがとうございました。

（令和元年10月2日午後　仙台文学館にて）

友の会随想

思い残し切符

友の会会員　佐々木　隆　二

緑豊かな環境にある文学館は、心のゆとりを取り戻すため「ぼうっとする」のにふさわしい場所です。森に風がわたり木の葉が揺れている。ここに来てそういう風景を眺めながら、日ごろ忙しく使っている頭の回線を緩めてぼんやりして下さい。

仙台文学館開館に寄せた井上ひさしさんのことばです。

「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と、チコちゃんに叱られてばかりいる私は、このことばを読み返してハッとしました。

自宅から一〇分も歩けば文学館、広場や裏山の森や、森に続く森林公園。公園でジョギングを日課にしているはずなのに、私はこの森でぼうっとしていなかったことに気がついたのです。

「いつもと違った時間や空間の中に身を置いてみることで、今まで見えなかったものが見えてきます」。ひさしさんのことばの続きです。

見えなかったものが見えるようになったのは、白内障手術のおかげだとばかり思っていたのですが、そもそも、私の見えるものの対象が違っていたようです。

星の王子さまも「心で見なくちゃ、かんじんなことは見えないんだよ」と言っている「こと」とか「もの」とは一体何なのでしょう。

ひさしさんの一つの答えは死を意識して生きることでした。

『イーハトーボの劇列車』に、死んで逝く人の思いを、生きている人に託す術として「思い残し切符」が登場します。死を意識して生きるという尊さです。

『宮沢賢治に聞く』にも、「死ぬ瞬間がつらかったら、その人の一生はつらい一生になります。あと二、三秒でおしまいという瞬間に、ニッコリ笑って死ねたら本望です」と書いています。

人の一生はどこへ向かっているのか。死んだ後でも、残された人の心の中に生き続けることができる。という畏敬の念。これこそがひさしさんの「思い残し切符」だったのではないでしょうか。

ジョギングは今朝も、ぼうっとしながら走ってきました。さらに、臨終に備えて密かにニッコリと笑う練習を始めました。

ところがです。人間性なのでしょう。いくらやってもニタッとしか笑えないのです。

会員からの一〇〇文字メッセージ

◆友の会には、平成13年度からお世話になっています。先日50年ぶりの友達が仙台に来られた際、文学館をご案内して喜ばれました。落ち着いてお話しも出来る素敵な空間です。会報への原稿募集、有難うございます。（松本ミエ）

◆自宅から比較的近いところにある仙台文学館は、私にとって文学を学ぶ場になっています。小森教授による夏目漱石を学ぶ講座や高橋教授による万葉集の解説等若い頃味わうことができなかった文学に接する出会い場です。（abeさん）

◆少子高齢化の波が顕在化している昨今、文学館が20周年を迎えたことは有意義なことと思います。地味な活動がマイナスと受け止められている面もあろうかとは思いますが、確実に市民に浸透しているのは間違いありません。（豊島光喜）

◆米寿に近い私は脚が弱って、文学館へ行けません。チラシや会報をしっかり読みます。井上、佐伯両先生の文章講座での素晴らしかった一時を思い出し至福の老後を過ごしています。で、命ある限り友の会の会員です。（多田緑）

◆「居ながらにして情報」これが、率直な感想である。各会会費複数件払っているが、仙台の情報は、文学館が「ナンバー1」である。初代館長井上ひさし君と仙台一高同期ということもあるが、会報他内容豊富感謝！（横山隆一）

◆仙台文学館の門を入るとそこは別世界、池にかかる橋を渡る時、胸がワクワクする。作家の小川洋子が文学は「広い世界へ行くためのドア」になると語っている。まさにその通り、今日はどんな世界が待っていてくれるか。（菊地長子）

高村山荘にむかう会員たち

◆山道を文学館迄歩いた昔の私。オープン間近の時は、おてんとさん影絵でお世話になり、寂聴さんのお話では大口開けて楽しく笑い写真に写されてオショシかったです。もう今は楽しい山道が遠すぎる年齢になりました。（佐藤美知子）

◆井上ひさし戯曲講座ニール・サイモンの回。書店で手にはいりにくいこともあって、指定の作品を事前に読んでいた人が少なく「その気になれば図書館に行くとか方法はあるはず」とお叱りを受けたことが思い出される。（阿部洋司）

◆祝二十周年！　仙台と白石を結ぶ文学館ニュース。最近は朗読が続き良かった。壇ふみ、加賀美幸子、恩田陸作品。前は藤沢周平氏の面影に会いに何度も足を運んだ。薄緑の封筒は来年も私に幸せを下さる。感謝！（富岡豊美）

文学散歩みんなでお昼ご飯

◆種々の都合で年五回の友の会読書会のみ参加している。友の会年会費は二千五百円――一回あたりワンコインとも思えぬ多彩で充実したメニューに、心はほかほか。休むとこの計算がややこしくなるので、休むな！私。（K・N）

◆皆さんこれでいいんですか？　世界中ざわつきが増す今、故井上氏の声が甦る。易しく深く愉快で真面目な企画展示に育てられてきた。更なる周年に向け皺を腰を寿命をのばし歴史を知り刻み伝えるべく、小径を通い続けよう。（遠野津仔）

◆食事、映画、買い物、どこでも会員登録を勧められる昨今、どうしても手元にカードがたまる。今持っているカードを並べてみると、ビカイチはなんと言っても文学館友の会の会員証である。ポイントは貯まらないが、美しい。（N・S）

これまでの会員証

第42回読書会

封印された愛をめぐる人間模様

「雪が降る」藤原　伊織

『テロリストのパラソル』で江戸川乱歩賞と直木賞をダブル受賞した作者の作品である。

大手食品会社のマーケティング部門に勤務する志村と高橋は同期入社の四十代。ひとつ上の役職にある高橋は、なにかと志村をサポートするよき友人だった。ある日、志村のパソコンに「雪が降る」とタイトルの付いたメールが入った。開いてみると高橋のひとり息子道夫からだった「母を殺したのはあなたですね」。

志村は高校生道夫に会い、嘘をつかずに話そうと決意する。道夫は亡き母親と志村の関係を知りたがった。母と志村がどのようにかかわっていたのか、男女の関係はあったのか、母が父よりも志村を愛していたのではなかったのかとたたみかけてくるのだった。

20年前、同期入社の松浦陽子をめぐって志村は高橋に敗れたが、そのことはふたりの友情にはなんの支障もきたさなかった。しかし、4年前東京に雪の降った日…。・物事がきれいすぎる・死んだ陽子の生活臭がない・矛盾点には目をつぶっている・17歳の少年が一番大人だ・人生はもっとシビアなもの・カラリとした読後感があった・タイトルがいいなどの感想が出された。出席者の半数以上から「これは大人のメルヘン」との感想が出されたのは、作品に流れている優しさゆえと思われる。

10月9日、8名出席。（佐）

花巻への見学会　解説を聴く会員たち

次回読書会は12月11日㈬14時

ソルジェニーツィン『イワン・デニーソヴィチの一日』（新潮文庫）

※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。